



このような悪を行ったので、ハマスが攻撃するのもやむを得ないことなのだ。」ハマスが主張していることのお先棒を担いでいる。テロリストの主張を容認しているわけですね。

以前からこの動画のシリーズで紹介していますが、ここには大きな嘘があるんです。でも、中東問題に詳しくない方・一般の方々がこういうことを聞いたらどう思うでしょう。国連の事務総長までがそう言うんなら、やっぱりイスラエルって悪いんじゃないのか。野蛮国家じゃないのか。人権蹂躪国家じゃないのか。そう思うてしまふんじゃないですか。

占領地については今までもお話ししましたが、質問も来ているので、もう一度取り上げます。というのは、前に言ったことでも、どうにもこうにも私の力なんて非力すぎて、世の中への影響力ほとんど無いんですね。

皆さんが Twitter/X（エックス）などで拡散していただいたら、もう少し影響・感化を与えることができるかなと思うんですが。

要は「前に1回言ったから、これで世の中は変わるわ」って、これはあまりにも甘いことなんですよね。繰り返し発信し続ける必要があると思うので、占領が本当にテロを生んだのかについて一緒に考えたいと思います。

イスラエルは1967年に起こった第三次中東戦争に勝ちました。防衛戦争ですよ。その結果、好むと好まざるとにかかわらず、4つの占領地を抱えることになります。上（北）から、ゴラン高原・ヨルダン川西岸・ガザ地区・シナイ半島です。今注目されているヨルダン川西岸とガザ地区は、イスラエルがパレスチナから取り上げたものではありません。

ガザ地区は、ガザ地区を占領したエジプトとの戦争でイスラエルが取ります。ヨルダン川西岸は、ヨルダンがパレスチナ人から取り上げて占領していたのを、ヨルダンとの戦争の結果、イスラエルが管轄下に置くことになったんですね。

さて、この戦争の直後に、国連で安全保障理事会が開かれました。そして『国連安保理決議242号』、これ超有名なやつですよ。1967年11月22日に採択されるんですが、その抜粋です。

### 国連安保理決議242（1967年11月22日採択、抜粋）

それには以下の諸原則が適用されなければならない。・・・

#### (a)イスラエル軍が最近の戦闘（\*第三次中東戦争）によって占領した諸領域からの撤退

これをしなさいと言うんです。実はこの242号というのは、国連の歴史の中でも後にも先にもない、非常に珍しい決議なんですね。何が珍しいのか。

ここで言っているのは、「侵略された国が軍事力を使い、自分たちの血を流して、侵略して来た国を追い返し、そこに攻め込んで占領した。その占領した土地を、侵略して来た国に、黙って返しなさい。」

侵略戦争でも、戦争の結果、土地を取ったら返さないのがほとんどですよ。

この第三次中東戦争では、イスラエルは攻め込まれたんです。攻め込まれたイスラエルが、攻め込んで来た敵軍を武力で押し返して相手の領域にまで入り、戦争がもう再発しないようにその部分を占領した時、「それを返しなさい」という命令の決議なんです。

こんなこと要求するってね、イスラエルに対して以外、1回もありません。今世界に200近くの国がありますが、こんな要求されてる国ってね、イスラエルだけなんです。

しかし、よくよく読むと、これだけではないんですね。多くの方は242号を見る時に(a)しか言わないんですが(b)があるんです。

**(b) この地域のあらゆる国家の主権、領土の保全と政治的独立性、安全で武力による威嚇や武力行使を受けることなく安全に、かつ承認された国境内で平和に暮らす権利の尊重と承認**

「イスラエルが平和に暮らす権利、それが尊重される決着の仕方です。やりなさい。」イスラエルが平和に暮らす権利が侵されるような占領地の返還は、ここでは想定されてません。

実は(a)の**占領した諸領域の諸領域**は、英語の原文ではterritories(テリトリーズ)で、定冠詞のtheが付いてないんですよ。もしthe territoriesだと意味が限定されます。この戦争で占領した全領域のことを意味するんですね。これ、theをわざと取ったんです。theがあると、イスラエルが占領したところ全部を指すので取ったんです。

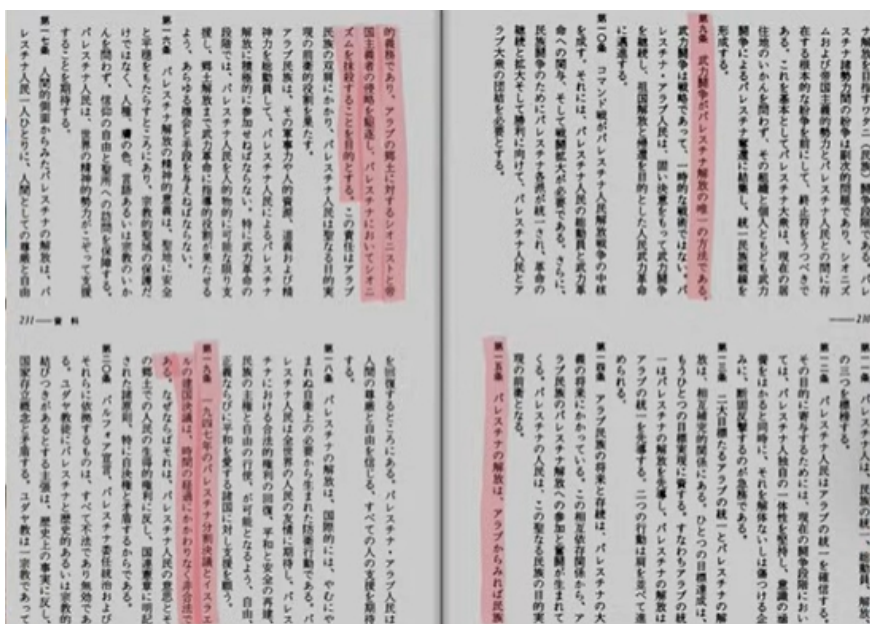
フランス語の文法では、単語に必ず冠詞を付けなければなりません。それで、このことが言えなくなるのでフランス語の採択文はないんです。英語のみです。英語のみでterritoriesと言っているんです。つまり、イスラエルが平和に暮らす権利と矛盾するような占領地の返還は命じられていないんですね。

もっと言うと、土地と平和の交換なんですよ。イスラエルが平和に暮らす権利を認めたら、認めた国には安全保障を侵さない程度の占領地を返すことになります。「土地と平和を交換しましょう」というのが242号なんです。

イスラエルはすぐにこれを呑みました。戦争が終わったのは6月10日ですよ。すぐに「これをやりましょう」とイスラエルの閣議で決まったのが6月19日。イスラエルはエジプト・ヨルダン・シリアに呼びかけ、更に、当時国家ですらなかった民族集団代表のパレスチナ代表にも呼びかけました。「イスラエルの生存権を認めるなら、占領しているところを返します。」

それに対してどうしたか。まず国の方から行きましようね。  
アラブの国々、エジプト・シリア・ヨルダン「ノー！」  
彼らはこの戦争に負けてしまった後、アラブ首脳会議を開き、「3つのノー」というのを採択するんです。アラブ 21 国が集まって、「イスラエルとは交渉しない」「イスラエルの生存権を認めない」「イスラエルと平和条約を結ばない」これが「3つのノー」です。イスラエルとは一切口もきかない。交渉しない。イスラエルの生存そのものを認めない。これをぶち上げてしまったんですよ。イスラエルは「認めてくれたら土地返します」と言ってるのに、「いや認めません！」なので、交渉が乗り上げてしまったんです。

では、パレスチナ代表はどうしたか。彼らは「パレスチナ民族憲章」という憲法みたいなものを持っています。これを、より過激で壊滅的で戦闘的なものに改定しました。



パレスチナ民族憲章の主だったところだけね。マーカーを引いている部分です。

**第 9 条「武力闘争がパレスチナ解放の唯一の方法である。」**

「話し合いしません。戦争でのみ解決します」と言ってるわけで、武力闘争路線の宣言です。

**第 15 条「パレスチナの解放はアラブからみれば民族的義務であり、…パレスチナにおいてシオニズムを抹殺することを目的とする。」**

シオニズム国家がイスラエルですから、イスラエルを抹殺することが目的なんです。

**第 19 条「1947 年のパレスチナ分割決議とイスラエルの建国決議は、時間の経過にかかわらず非合法である。」**

すなわち、イスラエルの完全抹殺を、ここで歌い上げているんですね。

これがパレスチナの代表だったということです。

よく「基本的にパレスチナ自治政府は穏健路線だ」と言うじゃないですか。

イスラエルとの武力闘争路線を放棄していると言いますが、厳密に言うとそうじゃないんです。そうじゃないから問題解決しないんですよ。



PLO のシンボルマークは、今でもそうなんですよ。  
自治政府は PLO の主流派のアッバス議長が今やっています。  
このシンボルマークの旗の下に、緑色の地図がありますね。  
これはヨルダン川西岸+ガザ地区+イスラエル全部なんです。  
全部緑色に塗りつぶされているでしょ。つまり、イスラエル無いんですよ。"PLO の設立目的はイスラエルを完全抹殺することである"  
というシンボルマークのデザインを今でも変えてません。



それから、PLO は派閥の寄り合いなんですよ。  
自民党の中に岸田派・安倍派・麻生派・森山派・菅グループ・茂木派など色々ありますね。最大派閥がやっぱり一番強くなります。PLO の色んな派閥の中で、一番大きいのがファタハです。ファタハのシンボルフラッグ・旗印がこれです。

黄色の字のところで 2 つのカラシニコフが交差して、下に手榴弾がある。  
これは、武力闘争で全部解決すると言っているんです。  
バックに緑色の地図が見えますね。イスラエルです。  
ヨルダン川西岸だけが緑色になってるんじゃなくて、ガザ地区（ガザは見えへんけど）だけが緑色になってるんじゃなくて、全面緑色に塗りつぶされてるでしょ。  
つまり、イスラエルには一坪でもやらん。イスラエル完全抹殺。それを今もやっている。パレスチナ民族憲章は未だに改定されてないですよ。

10月26日のウォール・ストリート・ジャーナル（日本語でも読めます）に、凄い記事が載ってました。10月7日のハマスによるテロの直前の9月、イランに約500人のパレスチナのテロリストたちが集まって、イランのクッズ軍団からテロの特殊軍事訓練を受けていたことが分かったんです。その中には、もちろんハマスもいる。イスラミック・ジハードもいる。その他イスラム原理主義のテロリストグループもいたんですが、それだけじゃなくて、パレスチナ自治政府の高官もいたんです！ハマスだけじゃなくて、パレスチナ自治政府の高官たちも入ってるんですよ！  
だけど、イスラエルには「我々はもう武装路線やめましたから」と言うんです。

ヨルダン川西岸でもテロがずーっと続いています。それに対して「いや、我々が知らん別の団体がやってるんだ」と言うんですけど、パレスチナ人全体の代表がパレスチナ政府なら、自分たちがそのテロのグループを逮捕しないと駄目なんですよ。でも、それをしないんです。

分割決議 242 号の内容は「イスラエルの生存権を認めたら土地返します。」  
でも、イスラエルから土地を取り戻すよりも全滅させる道を選ぶ。  
それで、中東和平が実現しませんでした。ところが、イスラエルと和平しようという、勇気ある決断する人物が遂に出て来たんですね。

それは、アラブの盟主エジプトのサダト大統領です。

サダト大統領は 1977 年に、イスラエルのベギン首相の招待でエルサレムに行っ  
たんです。仇敵イスラエルの首都エルサレムに行って、国会演説するんですよ。

「我々はアブラハムから出て来た子孫同士ではないか！」歴史的な演説をしたん  
です。これで和平条約に向かっていく、という腹積もりが出来ている。

そして翌年 1978 年、ノーベル平和賞を貰ったんですよ。

エジプトのサダト大統領とイスラエルのベギン首相がノーベル平和賞を貰い、  
1979 年にイスラエルとエジプトは和平条約を結んだんです。



エジプトはイスラエルの生存権を認め、その代わり、イスラ  
エルはエジプトから占領したシナイ半島を返しました。

シナイ半島はイスラエルの領土の 2 倍以上あるんですよ。

これを手放すということは、もしエジプトが攻め込んで来た時、  
戦略的重心性を失うということです。

でも、「イスラエルを認めると言ったんだから返そう」という  
ことで、これを返すにあたって、色々大変なことがあったん  
ですよ。

一つは、シナイ半島には油田があるんです。当時イスラエルは、国の中どこ掘って  
も石油なんか出て来ません。しかし、シナイ半島に油田があったので、ここを押さ  
えていた間、イスラエルは産油国の仲間入りをしてたんです。

だけど、エジプトがイスラエルを認めてくれるんなら全部返すということで、みす  
みす自分たちのエネルギー・生命線を手放したんですよ。

更に、もっと難しい問題があったんです。イスラエルがシナイ半島を占領していた  
時、多くのユダヤ人たちがここに入植地を持ってたんですよ。

しかし、ここを返せばエジプト領になるので、ユダヤ人たちはそこにいて安全保障  
パトロールする必要がない。その権利もない。

「我々は長い間掛かってシナイ半島を開拓して、こんな美しい町を造ったんだ！」  
と言うんですが、イスラエル政府は力を使って、ユダヤ人入植者たちを引き抜いた  
んですよ。そうして、242 号に基いて全部返したんです。

前にも言いましたが、戦争で勝った占領地を交渉でタダでお返しするという、そん  
な事した国って、第二次世界大戦の後は 2 つしかありません。

1 つはアメリカ。硫黄島と沖縄を返還しました。

もう 1 つはイスラエルです。こんな国はどこにもありません。

なぜ他の国は和平を結べなかったのですか。土地を返さなかったからですね。

このエジプトの様子を見て、やがて戦争から 27 年後ですか、ヨルダンも領土問題  
を解決するわけです。

ところで、最初にイスラエルを認めて、土地を、しかも流血無しで取り戻したサダ  
ト大統領、最後はどうなりましたか。

世界的にはノーベル平和賞を貰って、「そんな英断を下すことができるリーダーがアラブからも出た！」拍手喝采。ですが彼は、アラブ世界では裏切り者の烙印を押されたのです。

アラブ首脳会議がイラクであったんですが、それまではエジプトがアラブの盟主だったのに、そこから追放されました。そして、それまでアラブ首脳会議の本部はエジプトのカイロにあったのに、チュニジアのチュニスに移されるんですね。

「ユダヤ民族の国を抹殺するという大義をいの一番に放棄した裏切り者！」という事で、エジプト、特にサダト大統領はアラブ・イスラム世界で完全に孤立します。無血でシナイ半島を取り戻したのが1979年。2年後の1981年に暗殺されました。

第四次中東戦争の初期、エジプトはイスラエルに対して快進撃したので、エジプトではこの戦争に勝ったということになってます。

彼はその戦勝記念パレードを観閲台から見ていました。色んな戦車・装甲車・ジープや兵士の行進などがザーッと流れていきますね。共産圏などで。

彼はそれを見ていたのですが、ある装甲車が止まりました。ソ連製の車って時々エンストするので、いつものことかなと。そしたら、中の兵士たちがバラバラと降りて来て、サダト大統領の前に来たんです。彼は何を勘違いしたのか、敬礼してくれるんじゃないかと思い、立ち上がってその敬礼を受けようとした瞬間に手榴弾が放り投げられ、銃がダダダッと乱射。ほぼ即死です。



『サダト自伝』は朝日新聞外信部が翻訳しました。

『サダト最後の回想録』もあって、僕は2冊とも持っています。それを読むと、サダト大統領はイスラエルと和平条約を結んだ後、死を覚悟していて、この自伝の中にも、自分は必ず殺されるだろうということを予期する文章が出て来ます。

このパレードに出席する直前に、彼は言ってるんですね。

「自分は今まで長年の仇敵とされてきたイスラエルとの間に平和を作り上げた。これで人生は終わりだ。後は天に召されるのを待つのみである。」

つまり、イスラエルを認めるということは、リーダーにとって暗殺の対象ナンバーワンになるということなんです。勇気がなかったらできません。

サダト大統領は勇気を振るって、それをやったんですね。

それほどに、イスラエルを全滅させることがアラブの大義であると定着し、ハマスが言っているのは、それを宗教的に、より過激に、強力にしている思想なんです。

なぜヨルダン川西岸から入植地が去らないんでしょうか。シナイ半島にあった入植地は、シナイ半島が返還された時出て行きました。ガザ地区にあった入植地は、ガザを返還した時、イスラエル政府が全部引き抜いて返したんです。

なぜヨルダン川西岸の入植地を取れないんですか。引き抜かれませんか。

テロが未だに起こっているからです。さっきも言ったように、9月にパレスチナ自治政府の高官がイランに行って、テロの訓練を受けてるんですよ。これでどうして手放すことができますか。

手放さないからといって、国連 242 号に違反したことになりません。というのは (b) があるからです。(b) は “イスラエルが安全に生活する権利を承認する” と書いてあるんですね。

さて、グテーレスさんは「イスラエルが 56 年間も占領しているから、こんな目に遭ったのだ」と言ったのですが、それを歴史的史実に当てはめて考えます。1948 年から 1967 年まで（第三次中東戦争まで）、イスラエルは占領地を 1 つも持ってません。イスラエルの占領地はゼロです。しかし、この 19 年間、数千件のテロがあったんです。イスラエルはひっきりなしにテロ攻撃を受け続けたんですね。

1967 年から 2005 年まで、イスラエルはガザ地区やヨルダン川西岸から頻繁にテロ攻撃を受けました。インティファダや自爆攻撃があったんですね。そして 2005 年に、オスロ合意に基いてガザを完全に渡しました。ガザにあったイスラエルの入植地を、泣き叫ぶ入植者たちを、「ここはもう返すんだ！」と、イスラエル政府が問答無用で引き抜いて返したんです。

返した結果はどうになりましたか。ハマスのテロの本拠地になりました。地面の下は秘密トンネルだらけ。総累計 500 キロだそうですね。つまりどういうことかということ、占領地を持っていない時も、持った時も、返した後も、テロは続いている。占領地を持っているか持っていないか。これとイスラエルに対するテロは関係ありません。

イスラエルに対するテロは、占領地問題よりももっと深い問題があります。それは “イスラエルはこの地上に存在してはならない” というハマスの神学的世界観に基くものに由来しており、言いがかりなんですよ。

にも拘わらず、グテーレスさんは「ハマスにも言い分があるんだ。ハマスは理由もなくそんなことをやったんじゃないんだ。パレスチナの人々が 56 年間も占領されてるからだ。」  
事実誤認も甚だしい。テロリストの主張を、そのまま鵜呑みにして発信してしまったんですね。これは国連事務総長として非常に大きな失敗だと思います。

私たちは少なくともそのような発言に惑わされないよう、事実は何かを知ることが必要で、それによってテロリストの詐術に騙されずにすむのではと思います。

このシリーズ、しばらく続けていきますので、よろしければお聞き下さい。チャンネル登録もお願いします。ではまた、ごうちゃんねるでお会いしましょう。皆さん、お元気でいらしてください。さよなら！